



幼児期における身体的表現行動の発達について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター 公開日: 2020-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇土, 昌志, 森崎, 由理江, 三輪, 佳見, 高橋, 京子, 中園, 雅貴, 日高, 正博, Morizaki, Yurie, Takahashi, Kyoko, Nakazono, Masaki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/6944

幼児期における身体的表現行動の発達について

宇土昌志¹⁾ 森崎由理江¹⁾ 三輪佳見²⁾
高橋京子³⁾ 中園雅貴³⁾ 日高正博¹⁾

Development of Body Expressive Behaviors in Early Childhood

Masashi Uto, Yurie MORIZAKI, Yoshimi MIWA,
Kyoko TAKAHASHI, Masaki NAKAZONO, Masahiro HIDAKA

I. 問題の所在

平成30年4月施行の幼稚園教育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つとして、「豊かな感性と表現」が表れることを挙げている。そこでは、領域「表現」はもちろん、「健康」「人間関係」など各領域のねらい及び内容に基づく活動全体を通して育まれるよう留意することが求められている。このことは、教師に、幼児の表現の発達に対する多面的な理解に基づき、それらも複合的に育めるよう工夫して指導にあたる必要性を示すものと受け取れる。

この幼児期の表現の発達について理解していく上で、幼児の身体的表現行動に着目することが重要であると考えられる。なぜならば、身体は外界を知覚・理解する媒体、つまり、感性を育む土台であり、リズムを感じるなどして内界にイメージや情動を生じせしめ、表出する契機をもたらすため、また、運動能力に応じて表現の豊かさ、巧みさ、あるいは伝わりやすさが変わってくると考えられるためである。また、身体的表現遊びやダンスなどの表現活動は、教師との関わりはもちろん、子ども同士の交流によってその展開が促進される（遠藤,2017）。そこで、この身体的表現行動は展開の仕方によって、運動、コミュニケーション能力、自我や共感性等の発達に寄与する可能性を含んでいると考えられる。すなわち、幼児期の身体的表現行動の発達の様相について多面的に理解を深めることは、領域「表現」のほか、「健康」「人間関係」など様々な領域の指導に通ずる手がかりを得ることにつながるものと考えられる。実際、代表的な身体的表現遊びの一つである「ごっこ遊び」は、抽象的な比喩理解、つまり、「言葉」の発達を促進することが示されている（宮里ほか,2010）。

ところで、この時期の運動の発達段階は、ガラヒュー（1999,pp.68-71）によれば、「基礎的な運動スキルの段階」である。すなわち、幼児期は、走る、跳ぶ、投げるなどの基礎的運動パターンとも呼ばれる体の動きの形態が習得され、人間の生活に必要な運動のための幅広い土台をつくる時期であるとされる。しかしながら、近年、幼児の基本的な動きのパターン習得の遅れが報告され、運動発達の低下が幼児教育の課題の一つとなっている（中村ほか,2011）。背景として、

¹⁾ 宮崎大学教育学部 ²⁾ 宮崎大学大学院教育学研究科

³⁾ 宮崎大学教育学部附属幼稚園

吉田(2014,pp.67-68)は、運動遊びや日常生活での身体活動などといった運動経験が直接的に関係すること、また、遊び場などの物理的環境や、教育や運動に対する周囲の考え方や人間関係といった心理社会的環境の影響を挙げている。これに倣って推測するならば、幼児期の運動経験の量や質、そして、他者との関わりが、運動の幅を拡げ、ひいては身体的表現行動の発達に関係する可能性があると考えられる。とくに運動コントロール能力発達の敏感期とされるこの時期に十分な運動経験が得られない場合、運動が不器用な子どもになってしまうと考えられている(杉原,2014,pp.24-25)。幼児期の身体的表現行動の理解は、こうした課題の解決に向けても、重要な示唆をもたらすかもしれない。

以上のことから、本研究では、幼児期の身体表現行動の発達に着目し、心理学、社会学、運動学の立場から年齢ごとの様相を分析していく。これにより、幼児期の身体表現行動をどのように受け止め、関わっていく必要があるのかを総合的に検討していくための基礎資料を得ることを目的とする。

Ⅱ. 心理学的立場から見た身体的表現行動の発達

1. 心理学的立場から見た幼児の身体的表現

「表現」について、名須川(1991,p.99 /1997,p.115)がこれまで指摘してきたように既存の教科観に縛られずに、幼児の特性に基づいて表現活動のもつ意味を理解していくことは、幼児の「豊かな感性と表現」を育む教師の適切な関わりを考える上で重要である。

幼児期は、エリクソンによれば、幼児前期には言語の発達に伴い、言語によって意思表示を始め、自ら行動するようになる(自律性)。そこでは、親との愛着を土台として一人遊びができるようになる。また、幼児期後期には自分で考え、行動するようになり(積極性)、社会性や規範を身につけながら、徐々に少人数から集団での遊びができるようになっていくという。すなわち、幼児期とは自主性が芽生え、自他の区別、あるいは自らの存在と取り巻いている環境とのズレが明瞭となり、環境への働きかけや調整が求められるようになる。そして、環境へ適応的に自らの存在を位置付けていく時期と捉えることができる。これは、幼児が自らの欲求や在り方というものと同じ向き合う取り組み、言い換えれば、自らの存在を他者を含む外的世界と区別し、その外的世界とどのように関わっていくかを見つけていく作業—皆藤(1998,p.100)の述べる「いかに生きるか」というテーマにつながる一であると言える。言語の発達が未熟な幼児にとって、日々の生活の中で上述のような発達を実現させる手がかりとなるのは、実体として外的世界と接する身体の役割が大きいと考えられる。そう考えると、身体を介する外的世界との関わりそのものが身体的表現というように位置付けられる。ここでの身体的表現には、表現する身体と露わにされる身体が同時に現象しているため(石淵,2017,p.95)、幼児の伝達意思の在と不在に拠らず身体的表現による表現の過程や結果を身体を通して受け取る体験が心理的発達に結びつき、さらにそれは、身体的表現行動の発達を促していくものと考えられる。

また、幼児期の身体的表現と心理的発達を考える際、次の可能性も示唆される。言語能力が未熟な幼児は心の不具合を生じたとき、うまく言語化(意識化)できず夜尿症などの身体症状を呈することがある(心身症という)。あるいは、皆藤(1998, pp.100-108)が示した、幼児が保育園の廊下に座り込んで数か月間“籠城”した事例のように行動として表現される場合もある(幼児の行動は、単なる我が侬と侮れない大人が圧倒されるほどの迫力でその意思を全身で

表現し、まさに彼の全存在をかけた表現であった)。このことは、本節では身体的表現には様々な心理的意味を内包している可能性の示唆に留めおくが、これらの“問題”と映る表現の出現はしかし、幼児の心理的発達の機会でもあることを付しておく。

そして、幼児期の生活に目を向けるとき、日ごろの活動の多くは遊びに占められ、中でも「ごっこ遊び」は、この時期に好んで行われる身体的表現行動である。これは、身近な生活体験に基づき、自発的に他者や動物、キャラクターなど興味・関心を抱いた対象の動きを模倣したり、演じたりして、身体的な表現そのものや、その表現の交流からわき起こる楽しみや喜びを味わう身体的表現遊びである。この「ごっこ遊び」は、幼児の心のうちに生ずる衝動や欲求によって身体が突き動かされる、あるいは想起した事物を身体で表現する体験活動である。そのため、幼児の心理的発達と身体的表現行動の発達の様相がよく顕れると考えられる。

以上を踏まえ、本節では、「ごっこ遊び」を取り上げ、幼児個々の動き、しぐさや表情、発話などの表現行動の在り様、そして、集団の「ごっこ遊び」の展開に着目して身体的表現行動の発達と心理的発達の様相を探索的に分析していく。これにより、身体的表現行動において「表現の育ち」(清水, 2019, p.100)を促す援助や課題を検討していくための基礎資料を得ることができるものと考えられる。

2. 心理学的事例分析

(1) 分析対象

幼稚園の年少、年中、年長の各年齢において、2019年6～10月の間に自発的に開始された「ごっこ遊び」を幼稚園教諭がビデオ撮影した。その中から、幼児複数名で構成され、特徴の見られた各年齢1事例ずつを分析対象とした。

(2) 結果と考察

1) 分析対象事例

【年少】 女児3名がキッチン周りで作業するごっこ遊びの場面

- ① 食材、調理道具の玩具が揃うキッチンスペースに女児3名(A、B、Cとする)。BとCはドレス服着用。
- ② Aは物で溢れかえるシンクから容器等を取り出し、隣の棚へ丁寧に並べる作業を反復している。
- ③ Cは、食材を保管しているパントリーからトングで食材を取り、お盆いっぱい敷き詰めた後、その食材をシンクへ流し入れ、パントリーへトングとお盆を片付けた。このとき、Bは抱えていた赤ちゃん人形をパントリーに置き、二度Cのお盆に手を差し出し、受け取るしぐさを示すが、いずれもCは渡さなかった。
- ④ 再びシンク前に立ったCは、シンクに手を入れて食材を触る。すると、Aは「貸して!」と強く言ってCの肩を掴んで押しのける。Cが諦めて振り返ると、後ろにいたBに気づき、Bを連れてパントリーに向かう。Cは手で食材をポンポンと指し、手で食材を取ろうとしたBにトングを持たせて、お盆に食材を取るよう勧めた。
- ⑤ その裏でAは、シンクを見て退出しかけるが、戻ってシンクの食材を冷蔵庫へ並べ始め、いっぱいになると扉を閉めて退出した。CはBを補助した後、足元の手提げバッグに気づいて拾い上げる。バッグにはほつれた糸や衣服の裾が絡み、解こうとするが途中で手を離し、Aの立ち去った方を見渡す。Bは、撮影者に気づくと「何やってるの?」と話しかけて手が止まった。

【年中】 女児3名による“お買い物”にいく女の子と猫のごっこ遊びの場面

- ① 人形用ベビーカー（遊びの中ではスーパーで見かける“カート”）を手にした2名（D、Eとする。）と髪を二つに結んだ女児1名（Fとする。）。三人はEの提案でリビング調のスペースに移動。
- ② Fはソファの上で膝立ちをして「ばあ（みゃあ）！」と撮影者を驚かすように鳴きまねをし、Dは玩具を持ち出しカートの手提げ袋に収納。Eは待ちきれない様子で「お買い物に行きましょう？」と強く要請。
- ③ Fが床に四つん這いになってEのカートに手を乗せようとして、他の二人に注意される（注意後、Dは撮影者を見やる）。三者は向きを揃え、Eの「じゃあ、行きましょう？」との明るい号令に合わせて、D、Eはカートを両手で押しながら、Fは四つん這いで這って、教室外の半屋外へと出る。
- ④ Dは途端に駆け出し、EはFを一度見やるも追走したため、Fとやや距離ができる。ここでFが「ばあ（みゃあ）！」と声を上げると、D、EがFを振り返り、顔を見合わせると戻って合流する。
- ⑤ 三者横一列に並んで歩きますが、再びDが加速。EもつられたためにFが取り残されかける。Fは這いながら「ばあ（みゃあ）！」と鳴くと、気づいたEは「ああ〜！」と笑い交じりに後退。Dは止まって待機。
- ⑥ EがFと合流すると、Dは二人を確認して進み始め、遊戯室へ入る。Eが追いかけると、遅れたFが「ばあ（みゃあ）！」と声を上げる。Eは笑いながら少し止まるも、入室していく。Fは「ばあ（みゃあ）！」と繰り返すも、しまいには立ち上がって両者を追って走りだす。
- ⑦ 遊戯室は広く、D、Eは用具や周囲を避けながら奥へと進む。Fが「ばあ（みゃあ）！」と言って駆け寄る姿に気づくと、カートを押す二人は駆け出して追いかけてこが始まる。
- ⑧ Dを先頭に勢いよく室内を大回りする。撮影者に笑顔向けながら横切り、2周目に入る。遅れたEは方向転換し逆走する形でD、Fと合流。二人は立ち止まって笑顔で服や髪を整えている。三人揃うと教室へ帰り始めるが、Eのカートがスッと加速すると笑い声とともに追いかけてこが再開されていった。

【年長】 男児3名の間に見られた“お料理”ごっこ遊びの場面

- ① 教室で玩具のガスコンロ台を触っていた男児（G）は、男児（H）が用意した食材入りの鍋を使って料理開始（奥のキッチンで男児（I）が女児と料理）。Gはコンロに乗せた鍋を揺すりながら「じゅうじゅう」と言う。Hは「火を強くすると…」とつぶやきスイッチを弄った後、思い立ったようにキッチンへ向かう。
- ② Gは思いついたように突然、笑顔になり、鍋を持ったまま、空いている手でスイッチを強く連打しながら「じゅうう〜…！ほおん！」という声に合わせて手で弧を描き、爆発したかに見える。そして、撮影者を向いて「アツ火！強火！」と言ってスイッチをそれぞれ叩き、この後もコンロに向かって「アツ火〜…弱火」と独り言のように繰り返す。
- ③ Hが戻って、席へ着く。Gの様子を見て、二人で「強火」「弱火」とスイッチをパチパチ押し合う。Gは「あのね、こういう感じに変えないといけないんだよ」と言いながら、左右2口あるコンロ上で鍋を何度も行き来させる。鍋をスライドする度にカタタッと音が鳴り、中の食材がかき混ぜられる。
- ④ そこへ、Iが現われ、一回り大きな鍋をコンロの端に置く。Iは、笑みを受かべて二人に話しかける。Gは「焼けたよ」と鍋をもって立ち上がるとIは「焼けてねんだよ、こんなので」と笑いながら自分の鍋を持って立ち去る。GはHに鍋を渡すとIの背を一瞥。眉を顰め唇を突き出した表情のG。一方、Hは「よ〜し」とお皿を台へセットし、「ひっくり返す！どうぞ！」という掛け声と同時に皿めがけて鍋を一気にひっくり返す。ゆっくり鍋を持ち上げると、食材がお皿から落ちることなく重なって盛りつけられる。この様子を注視しつつGは足元をキックするように片足をぶらんと振って「ひでえなあ、あいつ」とつぶやくように漏らす。Hはどうだと言わんばかりに撮影者へ視線（撮影者の「おお」という声）。
- ⑤ Gに「焼けてる？」と聞かれたHは、鍋を振り回してぶらぶら体を揺らせながら「焼けてる」と答え、撮影者が「いいんじゃない？」「上手上手」と褒めると、GはIのいる方に向かって「上手だって！俺たちのやつ！」と言い放つ（Iは電話機に夢中で反応がない）。GはIに近づくソファに手をかけ、軽快に跳ねながら「ねえ！俺たちのやつ上手だって！」と繰り返す。
- ⑥ Gは、足元のレジの玩具を見つけると明るい調子で「はい！お会計！」と言ってコンロ傍へ運び込む。HはIの目の前の鍋を手取るが、Iに取り返され、元の鍋を持ってコンロに戻っていった。残るIは、取り返した鍋を置くと別の玩具で遊び始めた。

2) 考察

年少児に観察された「ごっこ遊び」場面は、お片付けや食材を集める遊びであった。ここでは、相互の交流は少なく、内容は単一的で反復作業とも受け取れる一人遊びに近い様相であり、数分の持続時間で終わるものであった。これらは、日ごろ目にする母親像への同一化や食材等の玩具を記号的に見立て、模倣に興じた遊びであったと考えられる。ここでは、感情の表出は殆ど読み取れず、各々の作業に動機づけられていた。コミュニケーションには、主に身体的表現が用いられ、Cのお盆保持(②)、AのCへの制止(④)のような強い身体動作を伴う意思表示とこれに従うという一方向的な疎通、また、CがBに手で説明する様子(④)が観察された。遊び自体の性格もあろうが、己の正面や手元を中心として注意の範囲の狭さ、このような言語や他者への気づき、共感性の未熟さといった要素によって、幼児のうちにイメージが広がる契機を得られず、単一的な表現となり、短い展開となった可能性が考えられる。一度Cがバッグを拾い上げる場面(⑤)で次の展開が予期されるが、絡んだ糸に気がいくうちにCに沸き上がったイメージが途切れたものと推察される。それでも、表層的ではあるが、玩具を食材に見立てる力が芽生えてきていることは確認できた。幼児が用いた玩具はプラスチック素材で変化がなく、触覚的、視覚的刺激が一様であったことも遊びの持続や展開に影響したのかもしれない。研・佐藤(2016)や遠藤(2017)は、素材の特性が幼児の表現を引き出す可能性を示している。したがって、素材の特性を考慮してアイテムを用意しておくことが、表現の発展的な展開を生み出す可能性が考えられる。

次に、年中女兒に観察された「ごっこ遊び」場面は、お買い物に行く“お母さん”と“猫”を出発点とし、追いかけてこへ転じた身体的表現遊びであった。ここでは、幼児3名がアイテムや互いの交渉や動きから一緒に遊びを成立させており、即興的な展開が見られた。カートのハンドルを握る幼児自身がコントロールしているはずなのに、スッと引かれるように加速して走り出す姿、また、“揃ってお買い物に行く”ため、追いつこうとするものの、互いの動きや位置関係から自然と追いかけてこが始まる様子が見られた。場所の「回遊性」は、身体活動量を増加させるという(仙田, 2003, pp. 148-149)。カートのスムーズに転がる感触や半屋外や遊戯室の開かれた空間が、幼児のうちにスピードに乗る心地よさや解放感を生み、走る動作に移行したこと、そして、相互の距離感が迫られるスリルや追う興奮と結びつき、追いかけてこに転じたことが考えられる。このように本事例は、三者の身体的表現の授受や身体が感じ取る様々な刺激によって発展的に展開し、心身の活動が大いに活発化した遊びであった。一方、当初の“お買い物”遊びが持続しなかったと見ると、その時々々の興奮が勝ったとも言え、これも年中児の特徴の表れであろう。

また、時折、撮影者である教師を確認する姿も観察された。ここでは、追隨した教師が、幼児にとっては自由を承認する見守り手として映り、遊びの展開にも影響した可能性が考えられる。これは、年中児は大人にどのように見られているかを気にし始める時期とも言える。

そして、年長の事例では、G、Hを中心に“お料理”ごっこ遊びが展開された。両者の間にはコンロの火がつき、鍋の食材をかき混ぜたり、火力を操作したりといった調理のプロセスが共有され、二人の手により料理が完成された。「焼けてる?」「焼けてる」というやり取り(⑤)からも、表現し合うイメージがよく共有されていたことを窺わせる。一方、途中から入ったIにはイメージが共有されておらず、否定的な言葉がかけられた(④)。それでも、両者の協同作業としてイメージが途切れず完成されたこと、また料理ができるまでの時間的な手順や流れ

を想起できている様子からは、年少児、年中児に比べ、イメージ想起能力が高いと考えられる。そこでは、調理にのめり込んでいる姿や、否定されるとむくれる、褒められて喜ぶなど感情が豊かに表出されており、彼らにとってはリアルな料理体験となったことが窺われる。

また、年長児においても撮影者である教師の存在を意識する様子が見られた。とくに幼児が教師の評価に喜ぶ様子(⑤)からは、見守り手の存在の大きさを感じさせる。途中、Iの心ない発言を注意するような介入をせず、完成されるまでの表現を一緒に味わうように見守っていたからこそ、「上手」という言葉がG、Hにとっていっそう達成感や自信を高めたものと考えられる。これはまた、大人の評価が年長児の心に大きく影響することの表れとも受け止められる。

(3) まとめ

本節では、幼児期の身体的表現行動として、幼児が自発的によく取り組む「ごっこ遊び」、その中の生活場面を模した場面を取り上げ、探索的に年齢ごとの事例の分析を行った。

年少児には、玩具が模した食材そのものなど直接的、表層的なイメージに基づいた表出行動が見られたが、発展は見られず短い遊びとなった。年中児になると、抽象度が上がり、ベビーカーをカート、生き物(猫)と目の前にないものを表現・共有したり、カートの滑らかな感触から疾走感を味わう展開に結びついたり、相互の状態から即興的に追いかけてこを思いついたり、身体感覚・表現を通して様々なものを感じ取り、少人数で一緒に遊びを展開させる姿が見られた。そして、年長児は、料理のイメージを擬音語や手の動きなどによってより具体的に表すようになり、互いに協調するほどにイメージが共有されていた。加えて、調理から盛り付けまで時間的流れをもった表現、そして、料理に対する豊かな感情表出からは、それだけイメージ想起能力が発達しており、幼児らにとってリアルなイメージ体験となったことが考えられた。

このようにイメージ想起や身体的表現が発達していく背景として、本事例からは、注意力や言語、他者への気づき、共感性の発達が関係している可能性が考えられる。あるいは、身体やイメージを軸として、これらは同期して発達していくのかもしれない。また、アイテムがもつ素材や特性が、幼児の身体に新たな刺激を生み、イメージを展開させる可能性がある。さらには、これらを実現する上で、本事例から教師が幼児の自由な展開を承認する見守り手として存在することの重要性が示唆された。

以上のことから、本節で、得られた知見については詳細な検討の余地を残すものの、幼稚園教育において身体的表現に関わる心理的発達の様相を踏まえ、幼児個々のイメージに寄り添い、表現を促す関わりを行うことで身体的表現の発達が促進されていく可能性があると考えられる。

Ⅲ. 社会学的立場から見た身体的表現行動の発達

1. 社会学的立場から見た幼児の身体的表現

さまざまな体験をしながら育つ幼児期は、生涯の土台である(向山,2014,p.20)。とくに、子どもを取り巻く環境が多様化する今日、家族以外の「社会」との関わりを深めることや関わり方を学ぶことが「集団生活の充実を図る」または「人間関係を築く」上で重要であると考えられる。このような「集団社会」で過ごすために必要なスキルは、幼児期から学習し身に付けていくことで、その後の小学校・中学校・高校といった学校生活における集団社会で活かすことのできる社会性技能(「ソーシャル・スキル」)、すなわち「生きる力」(文部科学省:学習指導要

領)に通じているといえる。

保育現場における幼児の身体的表現は、「舞踊的表現」と「劇的表現」に大別され、いずれも既成作品の動きの順序や動き方を「保育者が教える」形での活動が主流である(片山ら,2000,p.11)。一方では、日常的な遊びの中で自然に表出される身近な題材を対象とした「模倣遊び」や「ごっこ遊び」なども「子どもたち自身の創った動き」としてよく行われる(創造的な)身体表現活動であるとされる。また、このような「模倣遊び」や「ごっこ遊び」では幼児の「集団生活の充実を図る」または「人間関係を築く」ために必要なコミュニケーション力や対話力、協調性などといった「ソーシャル・スキル」が培われると考えられ、それらは「性差」および「年齢差」によっても異なるのではないかと想定される。

本節は、幼児の「模倣遊び」や「ごっこ遊び」といった「(創造的)身体表現」の中で観られる社会性技能(ソーシャル・スキル)行動を、「性差」および「年齢差」の観点から調査し、幼児期における身体的表現行動の発達について社会学的に分析する。

2. 社会学的事例分析

(1) 分析対象事例

分析方法は、ビデオ撮影による実態観察(見取り調査・聴き取り調査)とし、対象児を男児および女児の年少、年中、年長とした。着眼点として、上記のソーシャル・スキル行動である「コミュニケーション力」「対話力」「協調性」の三つのスキルを挙げ、「性差」と「年齢差」それぞれの観点において比較することで幼児の行動発達を調査した。

【男児：年少】

<飲食店のごっこ遊び>

園庭の遊具(プレイハウス)で、男児二人と女児一人が「飲食店の店員さん」の真似をする様子が見られた。一人の男児は、女児から出来上がった料理を渡された後、「これを持って行って!」という指示を受け、「わかった!」と言い、女児の発言に素直に従っている。女児がその場からいなくなった後、一人の男児がもう一人の男児に「〇〇君、もう帰る?」と聞き、「帰らないよ、僕は。今日は一人でお仕事をするんだ!」と、二人でお皿を直しながら会話をしている。そして、片方の男児が撮影者に「少々お待ちください!」と言い、料理を用意している様子が見られた。

【男児：年中】

<ゲーム「ルイージマシオン3」のごっこ遊び>

教室で、二人の男児がどの役を行うかを話し合う様子が見られた。A君が「〇〇君は最後のラスボス(最後に出てくるお化け)をやって、お願い!」と掌を合わせ頼む姿を見せ、B君は「最後のラスボスってどんなの?」と聞き返している。A君は「最後のラスボス」について「めっちゃ強いよ!」と説明しながらその動きを教える。その後、A君がお化けを退治する「ルイージ役」、B君がルイージから逃げる「ラスボスのお化け役」という役設定で「闘い」が始まった。

しかし、B君が「やっぱりラスボスじゃなくて、普通のお化けが良い」と言いだし、A君は「いいよ」と返答するが、最終的にB君はルイージが背負っているお化けを吸い込む「掃除機(オバキューム)役」に回り、二人でお化けを吸い込む動きを始めた。ビデオ撮影者に、B君は「僕の手がお化けを吸うやつ」と説明し、A君はB君の腕を両手で持ち、吸い込む動作を行っている。そしてA君は「誰かお化け役になって!」と周りの人物(先生や他の幼児)にお願いしている様子が見られた。

【男児：年長】

＜洗濯機のごっこ遊び＞

園のベランダで、一人の男児が水桶におもちゃを入れ、手でかき混ぜている様子が見られた。洗濯機になりきっていることから「ブーブー」という音のみを発しており、その場に居合わせた女兒（年長）から「止まれ！」と言われ、男児は洗濯機を回すことを止める。女兒はペットボトルのキャップで洗剤を入れる母親のような言動を見せ、その後「スタート」と言い、男児は洗濯機を回し始める。再度、女兒の「止まれ！」という発言に対し男児は洗濯機を回すことを止め、女兒が近くのおもちゃを水桶に追加し、そこで男児は「なんでこんなに入れてほしいの？」と水桶の中にあるおもちゃの多さからそのような言葉を発している。女兒は「私は洗剤を入れてるだけよ？」と言い返し、男児が「じゃあストローも洗う？」と言いながら再度洗濯機を「ブーブー」と回し始める。しかし、他の幼児がおもちゃを水桶いっぱいに入れ始めたため、かき混ぜることが困難となったことから、男児は「はい、エラーです」と発言している様子が見られた。

【女兒：年少】

＜料理のごっこ遊び＞

教室のお料理エリアで、三人の女兒が料理を作っている様子が見られた。そのうちの二人がエプロンを掛けており、一人はトングを持って野菜をトレーに乗せるようもう一人の女兒に説明しており、一人はキッチン周りや冷蔵庫の中身を片づけ・整理している。同じ空間にいるが会話はほとんどなく、説明も言葉ではなく行動で示している様子が見られた。

別の撮影では、同じくお料理エリアで四人の女兒が食卓を囲み、テーブルいっぱいに料理を並べている様子が見られた。しかしながら、そこでも同じ空間に居るものの一人一人違う行動をしており、会話する様子はほとんど見られなかった。

【女兒：年中】

＜母親と猫のごっこ遊び＞

別の撮影では、二人の女兒がおもちゃのベビーカーを押しながら、猫の役をしている一人の女兒と一緒に散歩している様子が見られた。ベビーカーを押し一人の女兒はエプロンを身に付け、もう一人はリュックサックを背負っており、「お買い物行きましょう！」「じゃあ行きましょう！」と母親のような会話をしている。猫役の女兒は「ミャーミャー」と鳴き声をあげながら、二人の後を四つん這い歩きで追いかけている。追いつけなくなったところで猫役は「ミャー」と鳴き、母親役二人は猫が来るまで待っている様子が見られた。

【女兒：年長】

＜パプリカを踊ったごっこ遊び＞

教室で、三人の女兒がドレスを着て「パプリカ」を踊っている様子が見られた。そこでは、リーダーシップを発揮する女兒が真ん中（センター）で踊り、二人の女兒が真ん中にいる女兒を見ながら踊っている。一通り踊り終えたところで、リーダー的存在の女兒は「じゃあ私は違う踊りにする」と言い出し、残り二人の女兒もその後を追うようにその場から離れた。続いて、同じ三人の女兒が楽器を使ってパプリカを踊り始める様子が見られた。リーダー的存在の女兒が「好きな踊りをして！」と指示し、あとの二人もその指示に従うように踊っている。また、最初の踊り同様に、リーダー的存在の女兒がセンターに立ち、その後ろで二人の女兒が踊るという配置設定が自然と表れた。続いて、2度目の踊りを終えるところで、リーダー的存在の女兒が「一人で踊る」と言い出し、音楽が振り出しに戻るところで「今度は私！一人ずつしようよ！」と最初に踊り始め、一人ずつ踊っている様子が見られた。

(2) 考察

本節は、幼児の「模倣遊び」や「ごっこ遊び」といった「(創造的) 身体表現」の中で観られる社会性技能（ソーシャル・スキル）行動を、「性差」および「年齢差」の観点から調査し、幼児期における身体的表現行動の発達について分析した。これにより、年齢が上がるにつれて、男児・女兒ともに「模倣遊び・ごっこ遊び」の中で観られる「ソーシャル・スキル行動（コミュ

コミュニケーション力・対話力・協調性)の広がりや高まりが見られ、容易的・単発的なごっこ遊び(身体表現)から複雑的・連続的なものになっていることが本事例から分析することができる(図1)。具体的に、年少児では男女ともに「料理」をテーマにした遊びで、男児では料理店で観られる店員の動き(お皿を直す)や言葉(「少々お待ちください!」)を表現し、女児

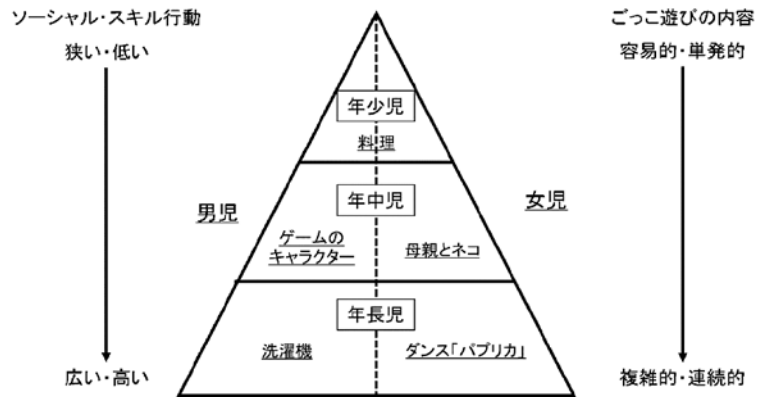


図1：幼児期の身体的表現におけるソーシャル・スキル行動の発達分析

では家庭で観られる料理作り(エプロンを着る、野菜を切る)を表現している。このように、年少児では身近にある光景の中で見られる動きや言葉をごっこ遊びの中で表現するものの、コミュニケーションや対話・会話が少ないことから、それぞれの役作りに明確さが見られない傾向にあった。年中児になると、男児ではゲームの中で登場する「キャラクター」を表現し、それぞれどんな動き・言葉によって相手にやってほしい役のイメージが伝わるのかを自分の中で考えて説明する様子が見られた。女児においても「母親とペット(猫)」を表現し、それぞれが行う役作りの設定過程で、年少児よりもコミュニケーションや対話・会話がより明確なものとなっている。このように、年中児になると個々が納得した上でごっこ遊びでの役作りを行うためには、他者理解や共感力といった協調性、すなわちソーシャル・スキルの重要性が高くなっていく時期であることがうかがえる。そして、年長児になると、男児は洗濯機といった「機械」になりきり、実用的な家電製品を表現している。この幼児は、洗濯機が物でいっぱいになると回らない(「エラー」になる)という機械の仕組みをよく理解し、他の幼児の「止まれ!」や「物を追加する」という言動に素直に従っている。そこには、洗濯機を「回し続けたい」という感情を抑える様子が見られ、年長児では自己抑制能力も培われるものと思われる。同様に、女児では最近の流行に乗った「踊り・ダンス(パプリカ)」を行い、テレビや周りの出来事を模倣して自己表現をしている。その中で三人の女児のうち一人がリーダーシップを発揮するが、その女児の指示に従う残りの二人の女児の自己抑制が感じ取られ、年長男児と同じく、自己抑制力も協調性を高めるスキルの一つであると分析できる。

このように、「性差」と「年齢差」を関連付けると、それぞれの発達状況に応じて自分の中にあるイメージを動きや言葉で表現したり、演じたりして役作りをするなど「ごっこ遊び(身体表現)」の方向性が見えてくる。それと同時に、年齢が上がるにつれて、それらの遊びの中で個々が「集団生活(遊び)の充実を図る」または「人間関係を築く」上で必要なコミュニケーション力、対話力、協調性の質・量が向上されており、幼児の「模倣遊び・ごっこ遊び」という身体的表現は、それぞれの発達段階に応じた「ソーシャル・スキル」を自然と身に付けることが可能となる重要な役割を果たすと考えられる。

(3) まとめ

今日、我が国は出生率の低下により、子どもの数が年々減少する少子化が進み、人と人との人間関係の希薄化やコミュニケーション力の低下が指摘されている(清水,2019,p.99)。その中で、集団社会における「ソーシャル・スキル」の重要性が高まりつつあり、とくに幼児期におけるコミュニケーション力や協調性の育成は、その後の人生を大きく左右するほど影響があると考えられる。近年では、幼児を対象としたソーシャル・スキルトレーニングやソーシャル・スキル教育を行っている事例もあり、いずれもソーシャル・スキルの必要性を強く推奨している(岡村ら,2009,p.234;清水,2013,p.37;藤枝,2014,p.38)。これを踏まえ、「性差」と「年齢差」を組み合わせた発達状況・発達段階に応じたソーシャル・スキル行動の育成方法についても検討することができるだろう。

IV. 運動学的立場から見た身体的表現行動の発達

1. 運動学的立場から見た幼児の身体的表現

表現運動というのは、運動学では日常運動、労働運動、スポーツ運動と並び人間の運動の一領域として位置づけられる(フェッツ,1979,p.71)。マイネル(1981,pp.16-17)によれば、「表現運動はわれわれの体験、感情や感覚、表象や思想を多かれ少なかれ無意識のうちに、あるいは、完全に意識して表わすものである」という。金子はこの本の訳注(マイネル,1981,pp.430-431)のなかで、無意識のうちに表れる表出と意識的に表していく再現という表現運動の両契機について述べている。

したがって、表現運動は人間の運動の他の領域とも関係づけられるのである。たとえば、スポーツの試合において勝利し興奮が高まって喜びの感情が表出したり、大切な試合で接戦の末に負けたときなどにも悔し涙があふれ出したりする。

幼児の場合、この表出性が「子どもらしさ」を示すものでもある。Buytendijk(1956,S.296f.)によれば、幼児の運動は達すべき目標にしっかりと関係づけられずに、内的な強い運動衝動から目標や意図からはずれて無駄に動いてしまい、随伴動作や運動の繰り返しといった運動過剰が現れるという。例えば、かけっこをしてもゴールに向かってまっすぐ走らず蛇行したり、ボールを投げるのにグルグルと何回も腕を回して勢いをつけて目標とは異なる方向へ放り出してしまったりする。

また、Grupe(1992,S.14)によれば、子どもは大人に比べて自己の身体性(Leiblichkeit)により強く結びついているという。そのためどうにもできない状況になると、泣きながら寝そべって床をドンドン踏み鳴らすというように、感情的興奮の身体への表出が抑えられないのである。しかし、年齢を重ね、様々な経験をしていくなかで、子どもは自己の身体性と隔たり(Abstand)をもてるようになる(Grupe,1992,S.15)。そして、姿勢、歩き方、抱擁といった身体的行動が社会的結びつき、つまり他者との関係をつくることを学んでいくのである。

2. 運動学的事例分析

(1) 観察対象

運動会で行うダンスの練習をする年長児・年中児・年少児の動きの様相を比較考察することにした。初めての練習(2019年9月26日)の様子と運動会の約3週間後に行った同じダンス(2019

年10月25日)の様子をビデオで撮影した。

初回の練習は親子で参加し、子どもたちは教師の示範を見ながら動いた。また、運動会の約3週間後の実践の場には保護者の参加はなく、はじめは教師の示範を見ながら行い、次に示範なしで子どもたちだけで音楽に合わせて動くように取り組んだ。

この二日間の実践のあいだにも運動会当日を含め同じダンスを行っているので、幼稚園教諭が観察した事項も含めて考察を進めた。

(2) 結果と考察

1) 「やらない」という選択

初回の練習時において、「やらない」という現象が年少児と年中児に見られた。親の隣にじっと立ったままであったり座り込んだりしているのである(写真1)。また、年少児のなかには、親に抱っこされたままの子どももいる(写真2)。初めて行くので、ダンスに振り付けられている動きは知らない。したがって、



写真1：座り込む年中児



写真2：抱っこされる年少児

教師の示範を見ながら模倣しなければならないのである。しかし、じっとしたまま動かない子どもは模倣することに動機づけられていない。ただ、親と一緒にいることも影響していると考えられるが、嫌がるような態度や素振りを見せるわけではない。つまり、みんなでダンスの練習をする場になじみを感じているといえよう。

一方、年長児の場合、じっとしたまま何もしないという子どもはいない。もちろん、すべての子どもがダンス好きで、「したい」と感じて前向きに取り組むわけでは必ずしもないであろう。それでも運動会で行うダンスなので、「したい」というほどでなくても「すべき」「したほうがよい」という意味で動機づけられるのである。

マイネル(1981,p.17)によれば、「表現運動の理解やその作用は自分の生活経験に依存」しているという。年長児であれば全員幼稚園で運動会を行った経験がある。運動会でダンスをすること、そのために練習すること、練習では教師の示範を模倣すべきことを理解している。

もう一つ特徴的なのは、初めから「やらない」のではなく、踊るのを中断してしまうということである。たとえば、踊っている様子を撮影しようとビデオカメラを向けると、カメラが気になるのか動くのをやめてしまう。前述したように、子どもの活動は目標にしっかり向けられておらず、子どもの注意は物音や動くものといった新しいものに向けられてしまうのである(マイネル,1981,p.300)。

2) 遅れる動き出し

次に年少児と年中児に見られた特徴として、示範や周りの人たちよりも遅れて動き出すということが挙げられる。保護者も一緒に参加しているので、教師の示範が見えないという子どもも多くいる。例えば写真3は、その場で駆け足をする場面なのであるが、保護者は胸や腰の高さで拳をつくっている。しかし手前にいる年少児は、まだ先行する振り付けの動きが残ってい

て、4枚目の写真でようやく「その場駆け足」の動きを始めている。また、写真4の年少児は、保護者が両手を身体の前で交差しながら屈んでいるのに、両腕を広げ、仁王立ちのように立っている。保護者が屈み終わるころに幼児も屈み始め、幼児が腰を曲げたときには、保護者は反対に伸びあがる動きをしているのである。



写真3：遅れて駆け足を始める年少児



写真4：遅れて動きがずれる年少児

一方、年長児は幼稚園で取り上げたことのない曲で初めての練習であるにもかかわらず、ほぼ同時に動いている。「みやぎき犬サンバ」という曲で、ローカルのイベントで披露されたことはあっても、テレビの幼児番組等で人気を得たようなものではない。したがって、ダンスに振り付けられた動きを前もって習得しているとは考えにくく、教師の示範や周りの人の動きを見て模倣しなければならない。それにもかかわらず、すぐ反応して動けるのは類似の経験があると推測できる。

3) 動きの質

初回の練習時では、年長児も示範を見て動くので、ごこちなさが残り、身体を大きく動かすことはあまりなかった。しかし、運動会の約3週間後の実践においては、完全にダンスの動きを覚え、教師の示範を外したときは役目を積極的に申し出る子ども、歌を歌いながら踊る子どももいた。

実際の動きを見ても、たとえば跳んで向きを変えることを連続する動きでは、年少児が接地するときの動きは弾性に欠け、繰り返し跳ぶことに多かれ少なかれ中断が見られる。それに対して、年長児のなかには曲げた腕を振りながら、リズムカルにはずむように跳ぶ動きを反復する弾力化現象（金子,2009,pp.226-227）を示す子どもが出てきている。

また、両腕を曲げて胸の前で交差させる振り付けでは、写真5奥の年中の女兒が腕だけの動きになっているのに対して、写真左手前に映っている年長の男児は、腕の動きに合わせて腰や膝を曲げ、背中も丸めている。この動きに続



写真5：大きく動く年長児

いて「その場駆け足」を行うのだが、写真6奥の年中女兒は、ほとんど足が上がりず接地したままである。一方、写真左手前の年長男児は足を後ろにはね上げるように膝を曲げ、さらに両足が床から離れ空中局面を形成している。このように年長児になると、上肢と下肢を協調的に動かし、身体全体を使って大きく動けるようになる。



写真6：弾むように動く年長児

(3) まとめ

自己の身体性と隔たりをもてるようになっていくと、ただ単に泣きわめきながら身体を激しく動かすようなことはなくなり、社会的な意味を考えて表現できるようになる。しかし、大人があまりにも社会的・文化的な形式にこだわりすぎて動きを型どおりにめ込むと、子どもの再現力だけを求めることになってしまう。フェッツ (1979,p.444) が指摘しているように、再現能力は具体的に課題を設定し合目的な運動訓練で改善できるが、表出は意識的に訓練することができない。意識すれば、それはもはや表出ではなくなってしまうのであり、表出能力を改善するためには、抑圧を除去し、表出を喜び、かつ促すような状況を作り出すことが必要であるという。

ところで、幼児は大人に比べて抑圧されておらず、自分の感情が表出しやすいのではないかと考えられる。しかし、だからといって幼児のほうが十分な表現力を有しているといえるだろうか。フェッツ (1979,p.438) は笑うということ为例にして、笑いを嘔み殺すというように、ある程度は表出を抑圧することができるかと述べている。そうすると、さまざまな笑い方ができるようになるであろう。さらに、意識的に笑う、つまり再現したとしても、天分に恵まれた役者は、もはや再現しているのではなく、表出しているかのように自分の役に溶け込んでしまうことができるのである (フェッツ,1979,p.440)。

幼児の場合も表出と再現という二つの契機を完全に分離しないようにして表現力を育てていく必要がある。今回のダンスのように、音楽、とくにリズムカルな曲調に反応しながら動き、しかも大勢で、同時に同じ勢いをもって動くので、「個々ばらばらで運動するときよりもはるかに解放的に、スムーズに、また積極的にさえ運動する」(マイネル,1981,p.179) ことができる。音楽に振り付けられた動きを指導するのだが、感情が抑圧されずに、表出が自然と流れ出るような楽しい状況を作り出すことによって、幼児の身体表現の発達を促進することができるであろう。

V. 結語と展望

本研究は、幼児期における身体的表現行動の発達について、心理学、社会学、運動学の面から事例的に検討し、幼児期の身体表現行動に関わっていくにあたっての基礎的資料を得ようとしたものである。

心理学、社会学の事例として取り上げたものは参加自由度の高い「ごっこ遊び」であったのに対して、運動学では自由度の低い「ダンスの練習と実践の場」を事例とした。いずれも年齢差 (年少児 (3歳)、年中児 (4歳)、年長児 (5歳)) や性差に着目しながら、子どもたちの行動を詳細に観察し、それぞれの立場から身体表現に関わる基礎的な知見を得ようとした。

心理学的立場から見た事例では、身体的表現行動（ごっこ遊び）の発達と、注意力や言語、他者への気づき、共感性の発達との間には関係性のあることが指摘された。また、アイテム（玩具等）の素材や特性が幼児のイメージを展開させること、さらに、幼児のごっこ遊びを承認しながら見守る教師の存在の重要性が指摘された。

社会学的立場から見た事例においても、遊びの発達と子どもの発達の間には関係性のあることが指摘された。すなわち、遊びの内容が、容易で単発的なものから複雑で連続的なものへと変化したのに合わせて、ソーシャル・スキル行動も狭隘なものから広範なものへと変化することが指摘された。とくに年長児の遊びの中には、他者理解や共感力、自己抑制力などを身に付けている姿が認められ、「ごっこ遊び」という身体表現には、発達段階に応じてソーシャル・スキルを自然な形で身に付ける可能性のあることが確認された。

運動学的立場から見た事例は、親子同時参加で行われたダンスの初回の練習の様子と、幼児だけで参加した3週間後のダンス実践の様子である。前述したように、「ごっこ遊び」が参加自由度の大きいものであったのに対して、このダンスへの参加は自由度の低い、半強制的なものであったところが特徴的である。年長児ほど社会的な身体に育っていることや、示範の動きとのタイミングの合致及び動きの質などから年長児の方がよりよく動いていたことが確認された。また、今回のダンスの事例では、型のある示範の動きと同じように動く再現を求めただけでなく、表出を喜び、促すような状況を作り出すことの必要性も指摘された。

三つの立場から幼児の身体的表現行動の発達について検討してきたが、ここで想起されるのは、矢野（1998, pp.100-121）が提示した二つの変容モデルである「生成の論理」と「発達の論理」である。矢野が指摘するように、「発達の論理の視点だけでは人間の変容の全体性を捉えることはできず、『全体的人間』となるためには生成の論理と体験を必要とする」のである。私たち大人（教師）はどうしても発達の論理だけで幼児の遊びを見てしまいがちであるが、今回の「ごっこ遊び」の事例では子どもたちの遊びが、「生き物のように自己展開」していき、「外部と自分とを隔てている境界が溶けるといって自己の溶解を体験」している姿も記述された。また、その子どもの溶解体験を肯定し承認する教師の存在の重要性も指摘された。さらに、ダンスの事例では「再現」の限界と「表出」を喜び促すような状況づくりの大切さも指摘された。すなわち、本研究は三つの面からの発達と身体的表現の関係について、その相互性などを論じてきた一方で、もう一つの変容モデルである「生成の論理」からの視点も含み持って子どもの身体的表現を見取れていたと言えるのである。この点は、今後の研究の道標を示し得たのではないだろうか。すなわち、発達の論理と生成の論理の融合した身体的表現行動の見取り方、及び、そのための研究の方法論の妥当性等について考究していくことが今後の課題となるであろう。

文献

- 1) Buytendijk, F.J.J. (1956) Allgemeine Theorie der menschlichen Haltung und Bewegung, Springer Verlag
- 2) 遠藤晶 (2017) 幼児の共感的相互作用による身体表現遊びの展開、武庫川女子大紀要 65: 1-9
- 3) フェッツ：金子明友・朝岡正雄訳 (1979) 体育運動学、不昧堂出版
- 4) 藤枝静暁 (2014) ソーシャル・スキル教育における発達段階ごとの目標スキルの選択と実施時期に関する研究、カウンセリング研究 47 (4)：37-47
- 5) ガラヒュー：杉原隆監訳 (1999) 幼少年期の体育 - 発達の視点からのアプローチ、大修館書店

- 6) Grupe, O. (1992) Zur Bedeutung von Körper-, Bewegungs- und Spiel-Erfahrungen für die kindliche Entwicklung. In: Altenberger, H. und Mauer, F. (Hrsg.) Kindliche Welterfahrung in Spiel und Bewegung. Verlag Julius Klinghardt, pp.9-38
- 7) 石渕聡 (2017) 幼児の身体表現と指導方法 - 触覚的身体の啓発に向けて -、教育学研究紀要 8: 93-105
- 8) 皆藤章 (1998) 生きる心理療法と教育 - 臨床教育学の視座から -、誠信書房
- 9) 金子明友 (2009) スポーツ運動学、明和出版
- 10) 片山啓子・光本弥生・西村敦子 (2000) 創造的身体表現活動の保育内容及び方法について - 「リズム運動」を作ることに焦点をあてて -、新見公立短期大学紀要 21: 11-22
- 11) マイネル: 金子明友訳 (1981) スポーツ運動学、大修館書店
- 12) 宮里香・丸野俊一・堀憲一郎 (2010) 他者とのやりとりに伴う身体運動感覚は幼児の比喩理解を促進するか、発達心理学研究 21 (1): 106-117
- 13) 向山陽子 (2014) <特集> 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと12: 幼児期は「準備期」? 人生の土台: 六歳の春に向かって、幼児の教育 113 (1): 17-20
- 14) 中村和彦・武長理栄・川路昌寛・川添公仁・篠原俊明・山本敏之・山縣然太郎・宮丸凱史 (2011) 観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達、発育発達研究 51: 1-18
- 15) 名須川知子 (1991) 幼児の表現生活に関する基礎的研究、兵庫教育大学研究紀要 11: 99-113
- 16) 名須川知子 (1997) 幼児前期の身体から派生する表現活動に関する研究、兵庫教育大学研究紀要 17: 115-122
- 17) 仙田満 (2003) 子どもの遊び空間、子どもと発育発達 1 (3): 148-152
- 18) 清水寿代 (2013) 幼児の集団ソーシャル・スキルトレーニング - 長期効果の検討 -、幼年教育研究年報 35: 37-44
- 19) 清水百合香 (2019) 幼稚園教育での幼児の遊びにおける「表現」の育ちに関する研究 - ごっこ遊びにおける幼児の表現と社会認識の芽生えに関する一考察 -、通信教育部論集 22: 99-119
- 20) 杉原隆 (2014) 運動コントロール能力発達の敏感期; 杉原隆・河邊貴子編、幼児期における運動発達と運動遊びの指導、ミネルヴァ書房: 24-25
- 21) 研攻一・佐藤由紀 (2016) ごっこ遊びの見立て行動を育てるための保育の試み、羽陽学園短期大学紀要 10 (2): 143-163
- 22) 矢野智司 (1998) 生成と発達の場合としての学校; 佐伯胖他編、学校像の模索、岩波書店
- 23) 吉田伊津美 (2014) 運動発達に影響を与える要因; 杉原隆・河邊貴子編、幼児期における運動発達と運動遊びの指導、ミネルヴァ書房: 67-68